

福井インターハイの思い出

39期 浅野 秀 剛

1967年8月、能代高校陸上部は、福井県で開催されたインターハイに出場した。高校2年の時である。私は400メートルリレーのメンバーとして辛うじて参加することができたわけであるが、ともかく嬉しかった。県外への旅行など、中学時代の北海道への修学旅行くらいしか記憶にないので当然であろう。

福井の印象はいえば、とにかく暑かったことである。最高気温が35度くらいになり、能代とは次元の違う暑さだと思った。夜も熱帯夜で、窓を開けて寝てもなかなか寝付けなかった。リレーは、第二走者で、夢中でバトンを受け取り夢中で渡したらあつという間に終わった。残念ながら予選落ちだったので、たった100メートルを走っただけの私のインターハイであった。もうひとつ記憶に残っているのは、出場選手は、競技場で、ヤクルトを無料で飲めたことである。その気になれば何本でも飲むことができるという特権が、少年の心をくすぐったのである。私は周囲の目を意識しつつ2本飲んだように思う。

インターハイが終わってから、数人で京都に行った。当時の写真を取り出してみると、裏に日付と場所が書いてあった。8月5日

は、京都大学、同志社大学、立命館大学、京都御所、金閣寺、龍安寺、苔寺、仁和寺、六日は、大徳寺と銀閣寺を廻っている。その時の記憶はいえば、大学を廻ったこと以外はほとんど覚えていない。つまり、インターハイの後、京都の大学に行ったことだけを記憶しているのである。思えば、高校を出た後の自分のイメージをそこに重ね合わせて記憶していたのだと思う。

子どもの頃は、時間の経つのが遅かった。それが十代後半から次第に早くなり、今は超特急で、あの世は目の前という感覚である。人は、忘れられないことと、忘れたくないことしか記憶しないと私は思っている。あつという間に終わった100メートル、暑い福井、無料のヤクルト、京都の大学、それが私の1967年8月の記憶のすべてである。

現役の高校生は、今は実感が無いと思うが、充分大人になった後に、3年間の中で何を覚えていたのだろうかということを、時々意識して高校生活を送って欲しいと願っている。

無線部からの巣立ち

40期 小林 哲

私の能代高校入学は1964年。日本は高

度成長期にあり、私は電子工学に憧れ、それへの近道に思えた無線部に入りました。

無線部では先輩に恵まれ、技術、法規、通信術などの指導を受け、1年生の秋には仙台北まで行って受験し、電話級と電信級のアマチュア無線技士の免許を取得してクラブ局JA7YCRの一員になりました。放課後の活動に加え、年に何回かのコンテストは徹夜の活動でした。十里強歩では、数か所の拠点で無線中継の準備をしたのですが、直前に強歩が中止になったため実現できず、残念でした。

当時は太陽活動が活発で10⁷の送信機で外国とも交信ができました。それをさらに改善しようと校舎の屋上に鉄塔を立て、回転式の八木アンテナを設置しました。近くの鉄工所に鉄塔制作を依頼し、設備変更届を東北電波監理局に提出したことを覚えています。このアンテナによって海外との交信が格段に容易になりました。オーストラリアの局と、つたない英語で一時間ほどにわたってモース符号で長話をしたことを今も記憶しています。

大学卒業後は郵政省電波監理局に就職し、通信、放送などの電波利用に関する様々な仕事に就きました。また、国境を越えて飛ぶ電波の性質から国際的な仕事が多く、米国イリノイ大学大学院に留学し、ジュネーブの国際機関に勤務し、また、数多くの国際会議で活



無線部ARDF大会

動しました。郵政省退職後は電波利用の標準化団体を経て、電波を使う通信を扱う会社勤務中です。国際活動は今も続いています。私のキャリアの原点は能代高校無線部でした。無線部の諸先輩と一緒に活動した部員、そして能代高校に心から感謝しています。イリノイ大学では、能代高校の三年後輩も入学してきて活躍していました。また、この10年ほどは、民放ラジオ局の要職に就いている無線部の5年後輩と仕事で一緒になることがあるなど、後輩の活躍に接し、世界は狭いと感じています。

この十年ほどの能代高校無線部は私たちの頃と違ってARDF（アマチュア無線方向探索）競技で大活躍です。県大会から全国大会へと進んで優秀な成果を挙げ、2008年からは世界大会への出場も成し遂げ、ARDFが能代高校の伝統になった感があります。

能代高校の後輩の皆さん、特に無線部の後輩の皆さんには、国境を越えて飛ぶ電波のように、能代、秋田を越えて世界に羽ばたく人材になって欲しいと思っています。

思い出と現在

42期 庄内 豊

「戦わん哉時いたる」、夕闇せまる樽子山のグラウンドで、円陣を囲みながら聞いた応援歌、唄ってくれたのは、故石井周平氏。涙が自然と流れた。能代高校の思い出を考えた時に、真っ先に出てくるのがそれである。私にとって、能代高校硬式野球部での経験故に、今があると考えている。苦しい練習、厳しい監督、水も飲めない。そんな環境で、2年間も主将を務めたのは、私一人だけである。苦勞して野球を続けたものだけが、もう45年も経過している今でも、年数回会って昔話に花を咲かせている。

試合で一番記憶が鮮明なのは、やはり最後の負けた試合。相手は秋田商業、2-2、九回の裏、一死一塁三塁。当然満塁策のケースで、投手の原田に声をかけに行つて驚いた。泣いていた。医師からの痛み止めの注射を毎日打っていた。何も言えずに守備に戻る、原

田が投げた、ド真ん中、それをスクイズ、サヨナラ。

仕事柄、海外に出張し色々な経験をした。湾岸戦争終結一年後、木の無い国サウジアラビアから木材を薄く削るスライサーの注文を受けた。能代出発二泊三日でリヤド到着。試運転の時、私は「ダメ」とNGを出した。所謂木の節の部分がでてきたからである。しかし、インド人のオペレーターは「No problem」と。間違っていたのは私。節（枝の名残）の無い木は無いのである。後日その単板が貼られたドアを見た。何の違和感も無い。私の感覚が間違っていることを気づかされた。因みに、サウジアラビア人のステータスは、自宅内装に木を使っているか。最近印刷シートをやたらに使う日本人に聞かせてやりたい。湾岸戦争後、クウェートは協力してくれた国々に感謝を表明した。それに日本が含まれていなかったことが残念でなかった。その後、造船会社から機械の注文が入った。米松70ミメートルの厚さを斜めに加工して長さ方向を接合するスカーフ加工機。機械を納入して驚いた。船大工たちが建造していたのは機雷掃海艇であった。70ミメートルを五層、350ミメートルが船の側面の厚さであった。後にペルシャ湾に派遣され機雷掃海の仕事を成事に達成し、日本の技術力の高さを世界に披露できた。

最近、モノづくりがいかに大事かを良く考
える。地方での就職傾向を見ると、まずは公
務員、銀行員が多い。しかしモノづくり産業
が発達しなくて日本はどうなるのか。公務員
や銀行員だけでは、社会は成り立たない。ぜ
ひ松陵健児には、日本のモノづくりに積極的
に参加して頂き、その製品を世界に広めよう
ではないか。

母校が更なる新しい歴史を積み重ねられま
すようお願いしつつ。

母校の校歌

45期 西村 省 一

そのかみはるか 城闊く

尽きせぬ流れ 米代の

水に我等の 聲はしき・・・

昭和47年(1972年)4月、私たち45期
生は半世紀の伝統をもつ樽子山(現能代市文
化会館)の旧校舎で校歌を学び、昭和50年3
月、高埕の新校舎で校歌を歌い卒業しました。

母校の校歌を聞くと涙ぐむ話があります。

「人は一定の年齢になると、学生時代の苦し
かったことや楽しかったことが思い出され熱
いものが込み上げてくる。同時にその思いに
浸ることの出来る安定した現在を確認するこ

とでもある。」とあります。私たちも還暦を
迎える歳になりました。

振り返ってみると、縁に囲まれた古い木造
校舎(窓ガラスには能中の文字)で、多感な
青春時代を素晴らしい仲間と3年間、切磋琢
磨できたことは最高の喜びであり、私の人格
形成にも影響を与えた貴重な時期でした。

旧校舎では、春はグラウンド脇に連なる満開
の桜の下で、早弁後の調理パンを食べ、放課
後は応援団による校歌の練習。夏は爽やかな
風がそよぐカーテンの下で大きな夢(5時限
目の居眠り)を見て、甲子園予選では真夏の
太陽の下、仲間と共に肩を組み汗だくの校
歌。秋の文化祭では、後にフォークソング歌
手「とんぼちゃん」となる二人が青春を歌い、
そして伝統の十里強歩、真夜中の体育館から
天にも届けと校歌が響き渡りました。冬はひ
たすら寒く、廊下は窓の隙間からの雪で真っ
白になり、教室は薪ストーブの前の席だけが
熱く、ほとんどが寒さを耐え忍んでいました。
昭和49年10月、現在の高埕の地に移転。広大
な田んぼのど真中に新校舎が完成しました。
当時はバイパス道路や建物も全くありませ
ん。真冬の農道をひたすら歩き、顔にたろっ
ぺ(つらら)を下げて学校に着いた時の暖か
さ(スチーム暖房)は今でも忘れられません。
個性豊かな先生方から多くを学び、人生の荒
波を乗り越えるための厳しさを教えていただ

きました。寒さの中で暖かさを知るように。

昭和50年3月、私たちは新校舎で最初の卒
業式を迎え、同期生三百数十名と歌う最後の
校歌となりました。

以来これまで数々の場で母校の校歌を歌っ
てきましたが、想い出の校歌といえば、昭和
49年10月、第29回国民体育大会で第3位と
なった我等軟式野球部が、茨城県土浦球場で
声高らかに歌った校歌。

・・・奮へ松陵 我が健児
奮へ松陵 我が健児。

振り返し地点のころ

46期 吉 田 真由美

東京の3月、ビルの陰や住宅街など思いが
けないところで沈丁花のいい香りに気づき、
足を止めることがあります。毎年この香りの
季節になると、能代高校を卒業して東京に
やってきた当時の気分が思い起こされます。
予備校に通うための上京でしたが、新たな広
い世界に歩み出すことがうれしく、不安より
も期待のほうがずっと大きかったように思っ
ます。東京の街で初めて出会った早春の香り
とともに、その浮き立つような気分がいまだ
によぎるのです。

思えば能代高校の3年間は、新しい世界に、東京に出ていくことばかり考えていたような気がします。そのためか、若いころは高校生活を振り返ってなつかしむということは、あまりなかったと思います。それが、十数年前から能代高校東京同窓会に参加するようになって、幅広い世代の先輩や後輩と話すにつけ、不思議にいろいろなことが思い出されてくるのです。

在学中の一番大きな出来事といえば、樽子山から高埜への校舎移転でした。2年生の秋のことです。東京同窓会の先輩たちと話していると、校門から続くプラタナス並木、「能中」ガラス、すきま風の入る教室、薪ストーブなど、樽子山の様子がありありと浮かんできます。また同世代や少し下の後輩と話題にのぼるのは、吹雪について高埜校舎に向かったきびしい冬の登校風景です。

私たちの学年の女子の割合は一割ほどでした。樽子山校舎では狭い女子更衣室に全学年がひしめき、家庭科の実習は北高まで受けに行きました。今では男女ほぼ同数とのことですが、女子が増え始めたのも、共学設備が整った高埜に移った辺りからでしょう。

学んだ校舎も生徒の男女比も大きく移り変わり、思い出に残る高校生活はそれぞれ違うはずなのに、同窓会ではみな能代高校の卒業生ということだけでうち分け、楽しく会話が

はずみです。母校を大切に思い、誇りを感じているからこそでしょう。

今年は創立九十周年とのことですが、私たち46期はちょうどその折り返し地点にいたことになりました。能代高校の歴史のなかでも、校舎の移転は大きな転換期だったのだろうと思います。

もとより九十周年はゴールではなく、これから能代高校の輝かしい伝統は末永く続いていくと信じています。樽子山世代と高埜世代をつなぐ者として、故郷を離れた卒業生の心のよりどころである東京同窓会を、これからも大事にしていきたいと願っています。

白禪の記

47期 秋 元 卓 也

「記」とあるが、物語である。深い群青の闇に、爪を押し込んだ跡であるかのような細い月が白く冴えて輝く夜、卒業式前夜の物語である。くどいようだが物語である。

受験期、O町のC君の家で勉強する機会が増えていた。それにK町のT君が加わり衆議は一決した。「溢れ出ずる愛校心と惜別の感情を後輩諸君に伝える」、同時に「新たに一步を踏み出す志に潔さを示し、後輩諸君へ

のエールとする」、「これら目的を遂げんがため、思いを歌にして晒しに書き、N君がモデルを務めた寒風に耐える自在の像に白禪を献上する」ことにある。

決行の夜はやってきた。卒業式前夜の10時、O町から道具を載せたリヤカーを1時間45分、高埜まで交替しながら引いた。春3月だが、リヤカーのタイヤは、往來のない7号線バイパスでバリバリと氷を踏む音を立てていた。

着いた。すぐに禪の装着作業にかかったが、思い描く青春の理想に現実とは容赦なかった。課題が現れたのだ。像が載る台座は高く、精一杯延ばした梯子の最上段に登っても下から手を掛けるのがやっと。手を掛けて登ろうにも台座面は、緩やかに地面に向かって傾斜していた。腕力だけで登ることは不可能。計画のずさんさに目をつむり、予行練習ができないことを理由にチェツと舌打ちをして諦めるか。と、突然バラバラと事務室に蛍光灯が点き、カーテンを開けて窓越しにこちらをのぞき込む姿が見えた。守衛さんがいたのか？地面の尖った氷に顔を付けて伏せた。しばらく息を押し殺していると灯りは消えた。

この数分の間に熱は、寒さの中で徐々に冷静へと姿を変えていった。何をやっているのか。そもそも、予行練習云々の前に気付くべきは、行為の愚かさである。否、今は思いの

深さで困難を乗り越えることが肝要であると、互いを奮い立たせ作業を続けた。

翌日。式前に手加減気味に禪を外そうとするN先生の姿があった。来賓の方々が横目にその光景を見ながら入場し、式は始まった。白禪は式の間中外されることはなかった。

「高埜に 匂い起こせよ梅の花 我ら去るとして 春な忘れそ」白禪に書かれた本歌取りを気取ったパクリ歌であった。

今は、文化祭に赤禪でと形を変えたらしい。嘲笑の的となりそうだが、能代高等学校にあの頃の熱が息づいているようで嬉しい。式を終えてT先生がニッと笑って「お前だろ。」とおっしゃった。剣ごと跳ね上げられた弟子の体で、「参りました。」と感服と謝罪の念でいっぱいだった……という物語である。



文化祭自在の像

袖振り合うも他生の縁

49期 中村浩三

2014年もあと3日で終わろうとしている頃、私は能代市文化会館大ホールのステージに立っていた。思えば、能代高校の名を冠した吹奏楽団を立ち上げ、年末に第1回演奏会を開催するという大それたことをしでかすことになろうとは誰が想像できたであろうか。それができたのも、そこにかかわる人や応援してくれる人、いろんな人の知恵と行動力と何より音楽（特に吹奏楽）に対する思い入れが結集したことに他ならない。もともと火事場の馬鹿力の如く、実力以上の力が働かなければ成し得なかったほどの大事業だった。特に、同期で音楽之友社のバンドジャーナルの編集長をしている大高達夫の力は大きかった。

思えば高校時代の3年間、何が残っているかといえば音楽と部活のことだけである。エレキと長髪は不良の証という時代はとうに過ぎていたが、それでも『お前は何しに学校へ行ってるんだ』と言われるくらい勉強はそっちのけで音楽と部活に没頭していたような気がする。ちなみに、だからといって演奏力とか技術力や表現力にストレートに繋がるものではないという言い訳を一応入れておく。



吹奏楽部 定期演奏会

さて、自慢というかアドバンテージとして語れるものでいえば「甲子園へ行った」という事実。しかも2年連続というのは、我々49期とひとつ下の50期だけ。そんなレアな時にそこに存在していたことをラッキーとすべきであろう。吹奏楽部員としては当然応援に行くわけだが、たとえば女子が全くいない、新聞部や写真部、応援団と一緒にむさ苦しいパスに割り当てられて26時間かかったとか、帰省ラッシュの渋滞に巻き込まれたとか、そういったアンラッキーなことも、その後吹奏楽コンクールでは悲惨な成績で終わってしまった

たことも含めて良い思い出である。

準備で遅くまで学校に残り、稲わらスモッグの中を帰るのが定番だった文化祭が、1学期に前倒しになったのは3年生の時だった。そのステージでも、ドラマーとしてロックだフォークだ当時流行り始めたクロスオーバー、本職のブラバンそして何より歌謡ショーと掛け持ち出演。この頃からの相棒が2011年に50歳の若さで他界したベシスト加藤成二である。私の音楽人生は彼無しでは語れない。高校生の本分である勉強はともかく、能代高校生だった頃に多大な影響を受け、人間形成されていったことが、今の私になった。しかしそれは偶然ではなく必然だと思っている。「袖振り合うも他生の縁」である。

松陵健児としての

誇りと使命

55期 寺田雅彦

東京って、アメリカかってどんなところだろうか。行ってみたい、住んでみたい。東京の大学生活、色んな友人をつくりたい、野球も継続してやってみたい、就職先は商社がいい、そして海外駐在もしてみたい、グローバ

ルに生きてみたい。こんな閉鎖的で不便で小さな田舎町能代から羽ばたくぞ！と将来に夢と希望をもっていた能代高校3年18歳の私は小僧でした。その頃は能代に対して否定的で外の世界が輝いて青い芝生のように見えていた。あれから30年経過した今現在、家業を継ぎ、能代が好き、この町を何とかしなければ、地域社会の食生活を支えていく仕事を通じて働いてくれている従業員220人、この人たちの幸せと生活を支えていく、そのためにどうしたらいいか、日々そんな事に終始している。東京にでて能代の良さがわかり、アメリカに1年いて日本のよさがわかった。28歳の時、父の導きで家業を継ぐ決断をして帰能した。仕事や生活をしていく中で能代の人たちや地域の良さをあらためて実感した。必要とされ仕事をし、必要とされ能代商工会議所などを通じて地域活動をしている今この状況を与えてくれたすべての人たちには心から感謝している。そして今後もこの能代の地域社会が発展していく事を願いこれからも活動していきたい。

今年平成27年1月に能代高校卒業後三十周年の同期会を開催した。我々は55期生の同期会を10年毎に開催し今年で3回目だ。懐かしい面々約90人の同期と恩師の先生方が出席し再会した。何しろ話が尽きない会だった。48歳の中年男女がこれだけ盛り上がるものなの

か、こんなに話があるものかという位の会であった。それだけ能代高校の3年間は皆にとつて輝かしく懐かしく人生の礎となった時間、その時間を一緒に過ごした友人たちとの会は30年前にタイムスリップしたような特別な意味のあるものであったに違いない。

最後に能代高校創立九十周年おめでとうございませう。私はその九十年余りの間、能代高校卒業生がこの地域のみならず全国各地で活躍している事、私自身も能代高校の卒業生である事を誇りに思っております。さらに、能代高校の卒業生がこの能代地域の屋台骨を支え伝承し脈々と継承していく中心的な存在となっていると言っても過言ではありません。能代高校の卒業生にはいくつになっても「松陵健児としての誇りと使命」があるはずですよ。その思いを忘れずにこれからも過ごして行きたいと思えます。

自由な時代に

57期 小澤澄人

創立九十周年、おめでとうございませう。心よりお祝い申し上げます。

今から、30年ほど前に我々は能代高校に入學しました。今思うと、とても自由な時代

だったような気がします。勉強はもちろん、部活・生徒会活動・全てにおいて自分たちの思うように行動が出来ていました。今の学生の皆さんはどうなのでしょう。そういえば、あの時代、ある歌手が「自由って一体何だ？」と歌っていました。時代を象徴するようなヒット曲がありました。

さて、そんな時代に私は生徒総会の議長を務める事となり、全校生徒の前にて議事進行をする事となったのです。議事進行は二人で行う事になり、議題を順調にこなし全ての議題は終了し、あとはその他の項目のみとなった時です。自分の左腕の時計を確認したところ、午前中の授業が終了する時間が近づいていました。その時、頭の中をよぎったのは一学年上の先輩の言葉でした。

「生徒総会をどこで終了させるかは議長の腕次第だ。」とこの言葉が議長を引き受けた時点から自分の頭の中をまるでメリーゴーランドのように何度もグルグルと回っていたのです。この時、先輩に言われた言葉の意味をやっと理解できました。そうです、午前中で生徒総会を終了させるも午後の授業の時間に持ち越すのも全て議長力量次第でした。確かに1年前の生徒総会も「猫が授業中に教室に入ってきて授業を受けていたのですが、猫からは授業料を貰っているのですか？」という質問が出て時間を超過した記憶が蘇ってき

たのです。もちろん、全校生徒の気持ちとしては午後の授業も生徒総会の時間にしてほしいムードで溢れていました。そこで、何度か「その他で質問や疑問はありませんか。」と聞いかけたところ3度目の問いかけの時点で一人の3年生がマイクの前に立ち「この前、校庭を歩いていたからカラスに頭をつつかれましたが、賠償請求はどこにしたらいいですか。」という質問が出たのです。その時、タイミング良く授業終了のチャイムが鳴ったので、私は間髪入れずに「この議題は午後から行う事にします。」と発言したのでした。

こんな馬鹿げた事を許してくれた当時の先生方に感謝するとともに、今この歳になって改めて懐かしく自由で良い時代だったと思います。そして、あの当時の気転の利かし方は今の仕事に役立っております。感謝！感謝！

九十周年によせて

60期 伊 勢 憲 一

高埕の地を卒業し、早二十数年が経過しました。教室の隅で細々と生活し、何とか高校生活の3年間を生き延びた身としては、このような記念誌に拙文を掲載することに戸惑いもありますが、社会の中核として活躍してい

る同期の諸氏から巡り巡ってきたであろうこの機会に、我が地味な青春時代を回想させていただきます。

高校時代は青春真っ只中、と言った誰かの頭を叩いて差し上げたくなるほど、僕の高校1年目は「青春」というより「真冬」でした。入学直後に部活動の選択で大きな失敗をしたことから始まったわけですが、高校生活最初の1週間にして完全に自分の進む道を見失っていました。僅かながらの誇りや自信は消え失せ、高校生活はおろか生きることへの意欲すら失ってしまいました。そして迎えた冬の定期考査ではもうどこにも落ちようのない状況となり、ようやく自分を変える努力を始めました。真面目に勉強を始めたのですが、不安から逃れるために何かをせずにはいられませんでした。自分は何者で何を為すべきか、たかだか十数年生きただけでわかるはずもなく、出来ることは目の前のことに精一杯取り組むだけ。それに気づけたことが高校時代に学んだ一番大きなことかもしれません。

現在秋田県内の高校に教員として勤務し、教員生活も気が付けば二十年近くになりました。自分が高校生だった頃とは学校のシステムも生徒の気質も変わりましたが、その人の根っこのようなものが形成される時期として、高校時代が人生において果たす役割は不変であるように思います。作家の福井晴敏氏

は、得ることに夢中で失ったものを顧みもしないのが成長期、失うことの痛みを知りつつ、なお前に進み続けようとするのが成熟期、酸いも甘いもかみ分け、達観した見地から己を俯瞰できるようになるのが老成期と定義しています。良くも悪くも自分の可能性や限界が見えてきた年齢ですが、人生を振り返るにはまだ早く、今後理不尽な現実を前にしても、前を向いて進んで行きたいものです。

能代高校の校訓である「至誠力行」。先が見えない社会や自分の人生においても、次の世代にバトンを渡すその日まで、一人ひとりが誠を尽くし勇気を持って行動することが、能代高校同窓生としての使命なのかもしれませんが、再び同期が一堂に会し、お互いの成長を確認し合える機会が訪れること、母校の更なる発展と皆様方のご健勝を祈念し、結びといたします。

三年間の日常が 今に与えていること

74期 工藤 宏子

秋田県立能代高等学校、創立九十周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

平成15年度の卒業式から早くも10年以上が経ちますが、思い出は最近の出来事のようにです。

皆様が能代高校の風景として最初に思い起こされる風景はどのようなものでしょうか。

私は、東能代駅から電車に乗り、車窓から見える能代高校の姿が思い出されます。卒業後は関東で暮らしており、能代市の実家に帰省して鉄道を利用する際には、いつも車窓から能代高校を目で追っているように思います。思い起こすと心から静かに力が湧いてくる風景が記憶にあることが、こんなにも自分を力づけてくれることを、地元を離れて知りました。

外観の風景の思い出から、続いて校内の風景が思い出され、当時の感情も蘇ってきます。当てられると緊張した授業、友人とお弁当を食べた昼休み、文化祭、十里強歩など、夢中で過ごした3年間でした。私が夢中になったことの一つに部活動があります。ご縁に恵まれ、女子バスケットボール部の前身である女子バスケット愛好会の創設の機会に巡り合いました。1年生の春、私達の最初の目標は「バスケットボールをすること」でした。練習が軌道に乗ると、次は公式戦への出場を目指し、学校公認の「同好会」への昇格へ向け、練習を重ねました。普段面識のある同級生、先生に限らず、とにかく様々な方に「がんばって

いるね」「がんばれよ」と声をかけて頂きました。1年間の愛好会期間を経て、2年目には新入生の参加もあり、同好会として承認、公式戦への出場が叶いました。気が付けば、同好会承認にたどり着いていましたが、振り返ると、仲間とひたすら走って、練習内容や目標を話し合い、ただただ1日の練習を重ねていたように思います。部活動を通して、自分の限界まで走ったこと、在りたい姿に向かって行動を重ねること、やりたいことができる有難さを体感しました。

当時、想像していた未来を今過ごしています。叶ったこと、叶わなかったことそれぞれありますが、能代高校で過ごした時間が今の私の糧となっています。また、3年間の日常を共に過ごした友人は今でも私の宝です。卒業後の方が話す機会の多い同級生もあり、いつも近くに居なくてもそれぞれの姿に励まされています。

最後になりますが、能代高校と学校に関わる皆様の益々の発展をお祈り申し上げます。創立九十周年誠におめでとうございます。